

2021年3月21日

受難節第六礼拝

「心の貧しいものは幸いです。天の御国はその人のものだからです。」

マタイによる福音書5章3節

マタイの福音書5章から7章はいわゆる山上の説教と言われているところで、イエスが伝道をはじめられたときに、これからもたらされる世界の憲法というか、そのようなものを語られた言葉が記されています。

3節では「心の貧しいものは幸いです。天の御国はその人のものだからです。」これは、私たちの考え方とはおおよそ真逆であって、貧しいものが幸いであるということはこの世ではありえない事であり、富んでいる者が幸いであり、貧乏人は不幸なのです。それはこの世の道理です。悲しんでいるものよりも、喜んでいるものが幸いなのであり、強いものや富んでいる者が勝者であって、弱い人や柔和な人はいつも放置されるのです。憐れみ深いようなことをしていたら人生の落後者になってしまうし、心の清いということも、この世では通用しないものになってきました。

ところが、イエス様が来られるこ

とによって、貧しい人が幸いになる世界がもたらされました。なぜそうなるかということは、私たちのレベルで考えてもわからないが、イエス様が、もたらされた新しい世界がどんなものであるかが書かれています。

「心が貧しい」を辞書で調べてみると、「度量が小さい」「しみつたている」「満たされていない」と、どこにも幸いな要素がないような意味合いです。さらに辞書の説明を見ると、「身の回りは裕福そうに見えても、心は貧乏人のそれである。」と、書いてあります。心の中は、見た目とは必ずしも同じとは限らないのです。

英語の聖書では、心の貧しい人は、

The Poor in spiritとあります。英語では、心は4つの表現があります。

感情とか心臓を表す HEART、思考や認識また判断などの働きを表す

MIND、精神の宿る場所を表す

SOUL、そして、肉体を超えた精神や魂を表す SPIRITです。この箇所

は、SPIRITが使用されています。直訳すると魂の貧しいもの、つまり、魂が渴いている者の事と理解できま

す。イエスは、誰でも渴いているなら、私のもとにきて飲みなさい。私を信じる者は、聖書が言っている通りに、その人の心の奥底から、生ける水が流れ出るようになる。つまり、聖霊なる神様がイエスを信じる者のうちに臨み、その人を通して、聖霊の実を結ばせてくださるのです。

高校生の頃、授業中に勉強の嫌いな私は、聖書を読んでいました。授業が終わり同級生の一人が声をかけてきました。

「なに読みよったん。」

「聖書」

「面白い？」

「うん」

「興味があるなら、読んでみる？」

と、こんな感じの話をしてギデオンの聖書をプレゼントしました。彼は、勉強が出来て普通は落ちこぼれのような私には興味を持って来ることがあるわけがないような人です。そんな彼が聖書を受け取り、後に教会に来るようになっていました。そして洗礼を受けクリスチャンに。私は、伝道しようとした思いもなかった授業中に聖書を読んでいただけです。授業中に聖書を読んでいるほう

もどうかと思いますが、それを見て信仰を持つのもどうかしています。本当のことは彼に聞いてみないとわかりませんが霊的に貧しく何かを求めていたのではないかと思っています。他にも何人かに聖書を渡しました。が何もありませんでした。

そんな彼も確か今日が結婚記念日だと思います。私の見た目では彼は失礼かもしれませんが結婚しそうというか、できそうもないように見えました。彼女は「私は、結婚しました。」という人でした。その二人は結婚32周年になり、両親も、子供もクリスチャンになりました。神様は、不思議なことをいと簡単に行われます。感謝なことです。

マタイの福音書9章20節

すると見よ。十二年の間長血をわずらっている女の人が、イエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。「この方の衣に触れさえすれば、私は救われる」と心のうちで考えたからである。イエスは振り向いて、彼女を見て言われた。「娘よ、しっかりしなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」すると、その時から彼女は癒された。と、あります。

祝福された幸いなものとは、靈的に謙虚な人々、悲觀に満ちた人々、忍耐強い人々、辛抱強い人々、義に對し靈的に飢えてる人々、あわれみ深い人々、心のきよい人々、平和を作りそれを保つ人々、正しいことを行つたためにそしてイエスのために迫害される人々です。これはこの世の基準と全く反対です。

心の貧しいものは、心の卑しい人、心の狭い人ではなく、自分の靈的な貧しさを知っている人です。自分の正しさを誇らず、心碎かれた者です。ルカ18章9〜14節に、自分を義人だと自任し、他の人々を見下している者たちに対しては、イエスはこのようなたとえを話された。

「ふたりの人が、祈るために宮に上つた。ひとりパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立つて、心の中でこんな祈りをした。

『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天にむけようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』

あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」とあります。

心の貧しいものは幸いです。このことは、この世ではイエス様を除いては理解できないのです。イエス様は、誰も相手にしてもらえず、自分はダメだと絶望している人のところに行つて友達になつて下さり、罪を犯しているからどうしようもないというその罪を、イエス様は引き受けてくださり、悲しんでいる人を探し求めてその人のところへ行かれるのです。だから、イエス様に出会つてイエス様からの慰めが与えられるから幸いなのです。

もし、私たちがイエス様に出会い、イエス様のみことばを聞き、手に触れ、足に触れようと思うなら、ここに書かれているような人となり、そういう生活をする必要があります。

テレビで猿山のことを見たことがあります。母猿の胸に抱かれた子サルですが何も無いときはいいのですが危険な状態になって走って逃げるとき母猿のお腹に必死になってしがみついています。必死とは、その手を離すと必ず死ぬということです。また、一方で子猫の場合母猫が子猫を口にくわえて安全な場所に運んでいきます。子猿のように必死にしがみつくようにはなく、子猫のように主に身を委ね信仰生活できればと思います。

主は、私たちのことはすべてご存じです。

【お祈りいたします。】

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。人が自分の友のためにいのちを捨てること、これよりも大きな愛はだれも持っていません。わたしが命じることを行うなら、あなたがたはわたしの友です。わたしはもう。あなたがたをしもべとは呼びません。しもべなら主人が何をするのか知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。父から聞いたことをすべて、あなたがたには知らせたからで

す。あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました。それは、あなたがたが行って実を結び、その実が残るようになるため、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものをすべて、父が与えてくださるようになるためです。あなたがたが互いに愛し合うこと、わたしはこれを、あなたがたに命じます。